

---

# 嫌われヒーロー

てんこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嫌われヒーロー

### 【Nコード】

N9541Y

### 【作者名】

てんこ

### 【あらすじ】

目が覚めるとそこは、真っ白な世界だった

突然現れた謎の男に、自身が事故死した事を知らされた青年、さかき 榊  
光夜。こひや

男は光夜を『特別な人間』だと言い、ある事を頼む。

それは、別の世界を救うという、ファンタジー小説ではよくある話  
だったのだが

「ヒーローって、人気者のはずだよな

」？

目が覚めるとそこは、真っ白な空間だった。

「は　　？」

ゆっくりと上半身を起こし、辺りを見回してみる。

何もない。建物も、人も。

周りは白一色で、壁や床の境目は見えず、すぐそこが壁のような、無限に空間が続いているような、不思議な感じがする。

どこだこじ　　。

こんなところへ来た覚えなんてない。

今朝も、いつも通りに学校へ向かってて、それで

「つつ　　！」

直前の行動を思い返していると、急に激しい頭痛が襲ってきた。

頭を、ものすごい力で無理矢理ねじられてるみたい、な、い、いたいたいいたいいたい！！

生まれて初めて味わう激痛に、無意識に体を丸める。少しでも和らげたくて力一杯頭を抑えつけてみても、痛みはひくどころか強さを増していった。

「うああ、あ　　！」

あまりの痛みに、目からは次々と涙が溢れてくる。なぜこんな目に

あわなければならぬのか　　徐々に薄れていく意識の中でそんな事を考えていたときだった。

『お、やっと起きたかー。』

突然。

頭上から、若い男の声が降ってきた。

朦朧とする意識の中必死に目をやると、金と白に光る何かが見えた。

「あ　　」

『んん、起きたばかりだからね。』

「　　?っ、」

男は軽い口調でそう言うと、膝をついて、俺の額に右手をあててきた。

意味がわからなかったが、振り払う気力も起きない。されるがままになって、一分ほどだろうか。

「あ　　?」

『ふふふ。楽になってきたでしょ?』

そう。

不思議なことに、男の手が触れているところから、徐々に痛みがひいていく。

数分もすると、頭痛はすっかり治まっていた。

「はあ。」

ゆっくりと上半身を起こして、深く息を吐く。だるさは残っているが、意識はしっかりしている。緩く頭を振って顔をあげると、目の前の男はニツコリと笑顔を浮かべていた。

金髪碧目の、彫りの深い西洋風な顔立ち。垂れ目のせいか、優しそうな雰囲気だ。神話や古代ギリシャの絵画から抜け出てきたように、手触りがよさそうな白い布をゆったりと身体に巻きつけている。古風な格好だが、ここでは自然と溶け込んでいた。

つか、ここは、どこなんだ？

気づいたらここだったし、思いだそうとしたら頭痛くなるしな。

「あの、ここはどこですか？」

『ここかい？ここはね、あの世とこの世の狭間の世界だよ。』

「は？」

『ふふふ。信じられないよねえ。でも、紛れもない現実なんだよね』

榊 光夜（さかき こうや）くん。』

「な、」

なんで、俺の名前を

さらりと告げられた言葉に、背筋がゾツとする。

こんなヤツ、今まで会った事もない。

さっきの頭痛も意味がわからなかったけど、狭間の世界ってなんな

んだ？あの世とこの世って、まるで

『気づいた？』

顔から血の気がひいていくのがわかる。

見上げたままの姿勢で固まっている俺に目を細めた男は、ゆっくりと口端を吊り上げた。

や、めろ。やめろ。それ以上言つな      !!

『君はね、死んだんだよ。』

「嘘だ！」

『嘘、ねえ

こんな嘘ついて、何の得があるっていつのそっ、』

「それは、は

」

馬鹿にしたような笑みを浮かべる男の発言に、言葉に詰まる。それは、そう、だけど！  
でも。

この緊張で湿った手の感触は。

まだ速い鼓動の音は、なんなんだ。

『生きている時』と、何も、変わらないのに。

『 本当は、覚えてるんじゃない？ 』

男の、色素の薄い目が俺を射抜く。

それは、とても奇妙な瞳だった。

両の目の中では、金や銀の光が不規則に踊っている。線香花火のよ  
うに弾けて消える煌めきから、目がそらせない。

『ねえ。』

次の瞬間。

けたたましいクラクションの音と、目前に迫るトラックが見えた。

「あああああああー！！」

どん、という鈍い衝突音。

全身に走る衝撃。宙を舞う体。体の自由はきかず、スローモーションで流れていく景色をただ眺める事しかできない。そうして徐々に、硬質なアスファルトが迫ってくる。

あと、数センチ

『思い出した？』

「っ  
「！」

男の声で、我に返った。

周りにはトラックも交差点もなく、相変わらず白い空間が広がっている。

冷や汗が止まらない体を、強く抱き締める。

そうだ。

俺は、トラックにはねられたんだ。

『ごめんね。普通なら、”自分が死んだ”事は、ゆっくりと認識させていくんだけど。今回は、急いでたから。』

申し訳なさそうにこちらを見る男に、曖昧に言葉を返す。

死んだ事に納得がいった訳ではない。それでも、認めてしまえば不思議と、冷静になれた。

19年か

短かったな。

特筆する事もない平凡な人生だったけど、それでも楽しかったし、精一杯生きていた。

それが。こんな終わり方だとは、考えもしなかった。無意識に、唇

を噛み締める。

『それでね、君を呼んだ理由なんだけど　　ある世界を、救って欲しいんだ。』

「　　え？」

やばい、全然聞いてなかった　　！  
慌てて顔を上げると、男はあからさまなため息をついた。

「わ、悪い　　」

俺は生前、集中すると周りの声が聞こえなくなる、ということが度々あった。悪い癖だと、注意されていたんだが　　。  
素直に謝ると、男は苦笑しながらも再度口を開いた。

『　　世界を、救って欲しいんだ。』

「世界を救う　　？」

『そう。もちろん、タダで、とは言わないよ。』

そう言って、男はニヤリと笑った。



「能力？」

『うん。魔法だったり、武器に関する事だったり  
いろいろあるよ。いくつ能力が宿るかは、その人次第だけ。』

「ふーん。」

『どう？引き受けてくれる？』

「もし、俺が断ったら？」

『残念だけど別の人を探すしかないねえ。 次は、3日後だね。』

「そうか。」

やっぱり、『俺』じゃなくてもいいんだな。

そうじゃないかとは思っていたけど、こつもはっきり言われると悔しい。

俺が断れば、彼は別の人を勧誘しに行くのだろう。きつと、いや確実に。

そうになると、もったいない気がしてくるから不思議だ。怪しすぎるのはわかっている。けれど

「なんでも叶えてくれるんだよな？」

『大抵の事はね。』 “生き返らせる” とかは無理だけ。』

「わかった。その依頼、引き受ける。」

『 願いは？ 』

男は相変わらず笑顔のままだ。

その表情が癢にさわる。まるで、俺がこつ答えるのがわかっていたかのようで。

「 願いは 」

胸中は不安でいっぱいだった。

本当にこれでいいのか、正直なところわからない。寧ろ、間違った選択をした気がする。

それでも、答えは変えない。  
変えられない理由があった。

「 願いは、 『 母さんが3億円の宝くじに当たること 』 だ。 」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9541y/>

---

嫌われヒーロー

2011年12月11日22時58分発行